

耳の聴こえない両親を持つ“聴こえる子どもたち”
コーダの悩みと希望を綴ったドキュメンタリー

私だけ聴こえる

2022年/監督:松井至/共同監督:ヒース・コーゼ
ンズ/配給:太秦/上映時間:1時間16分



OTEMJIN / RITORNELLO FILMS

耳の聴こえないろうの両親から生まれた、耳の聴こえる子どもたち、コーダ (CODA: Children Of Deaf Adults)。家では手話で、外では口話で話す彼らは、学校に行けば“障害者の子”扱いされ、ろうからは「耳が聞こえるから」と距離を置かれる。本年度アカデミー賞の最優秀作品賞を受賞した『コーダ あいのうた』で、その存在が広く知られることになったコーダ。その言葉が生まれたアメリカでコーダ・コミュニティを取材した初めての長編ドキュメンタリーを、日本人監督・松井至が手がけた。これは、15歳というアイデンティティ形成期の多感な時期を過ごすコーダの子どもたちの3年間を追った作品である。

聞こえる世界にもデフ (ろう) の世界にも居場所のない彼らは、一年に一度の“CODA サマーキャンプ”の時だけ、ありのままの自分を解放し無邪気な子供に戻る。15歳。サマーキャンプは終わり、進路を決める大切な時期に入る。「私はデフ (ろう) になりたい」という深い欲望に突き動かされ聴力に異変をきたすナイラ、自分を育ててくれたデフ (ろう) の母から離れて大学に行こうと葛藤するジュシカ、コーダである自分の人生を手話で物語ることで肯定し友達を作ろうとするMJ、さらに日本とアメリカを行き来し手話通訳士をするアシュリーが妊娠を機に「お腹の子がデフ (ろう) になるか聞こえる子になるか」という悩みを抱えながら出産に向かう……。監督・松井至は“社会の周縁に生きる人々の知られざる物語”をテーマに映像作品を制作してきた。2016年 TokyoDocs にて最優秀企画賞を受賞した後、取材を続け、2021年に北米最大のドキュメンタリー映画祭 HotDocs に選出されるなど、現在世界各国で上映を行っている。音のない世界と聴こえる世界のあいだで居場所を失い、揺らぎながらも自らを語り、成長していく子どもたちの姿から、コーダの知られざる物語を綴る。

東日本大震災・原発事故を経て、生き方を見直し
「発酵」の力に気付いていった人々の記録

発酵する民

2020年/監督:平野隆章/出演:瀬能苗里子、大嶋櫻子、山口愛/配給:福々映像/上映時間:1時間32分



海と山に囲まれた古都・鎌倉。2011年、このまちを「脱原発パレード」で歩いた女性たちが「イマジン盆踊り部」を結成した。彼女たちは、日々の生活の中で浮かび上がってくる思いを唄にして踊り始める。お酒や味噌、パンづくりから生まれた「発酵盆唄」。海水を汲み、薪で火を炊いて塩をつくる「塩炊きまつり」。やがて、風変わりな唄と踊りが人びとをつなげ、「平和」の輪を描いてゆく。この映画は、鎌倉や葉山での「生活」を描きながら、個性溢れるパン屋や酒蔵も取材。人間以外の存在にも耳をすます。微生物たちの「発酵」の世界や太陽系の惑星の動きが交差する。混沌と優しさの中で、何が見つかるだろうか。

監督は、野宿者や原発事故による被災者の取材を行う一方で、野外レヴズや美術館等で映像作品を発表してきた平野隆章。映画音楽には、ドイツの「Kompakt」レーベルから作品をリリースする pass into silence が参加。東日本大震災・原発事故から11年。あの時に生まれたものは、今も確かに続いている。音楽やアート、ジャーナリズムなど異なるジャンルが映画の中に入り込んだ鎌倉発「発酵」ドキュメンタリー!

鶴田真由さん (女優) のコメント 天災、原発事故、コロナウィルス……人間の自然の摂理に背いた行いからの振り戻し。自然の理はそのようにしか存在しないのだから、そろそろ自分の在り方も見直すべきだと思う。きっと、もうみんな気づいている。世界がカウントダウンに入っていることを。こういう時、やっぱり女性は早いな、と思う。地位や名誉で動かないからなのか。子供を守りたいという愛に裏づけされた感性で動けるからなのか。どんなことが心と身体が喜ぶのかを知っている。そこに従えば「幸せ」は近くなる。「楽しいからおいでよ!」と彼女たちは言う。そんな意識の発酵のはじまり@鎌倉。この映画はそんな発酵はじめの記録の一部だ。

北朝鮮に暮らす姉との58年ぶりの再会

ちょっと北朝鮮まで 行ってくるけん。

2021年 / 監督: 島田陽磨 / 配給: 日本電波ニュー
ス社 / 上映時間: 1時間55分



熊本県で訪問介護の仕事をしている林恵子、67歳。子どもたちはすでに独立。休日には友人らとカラオケや居酒屋に通う平穏な日常を送っている。しかし恵子には、家族や親しい友人にも語ってこなかった、ある秘密があった。それは実の姉が北朝鮮にいるということ。20歳上の姉、愛子は1960年に在日朝鮮人の夫とともに北朝鮮に渡っていった。渡航後、手紙で伝えられる姉の変貌ぶりに、恵子はやがて落胆し、反発。そして絶縁する。その後、日朝関係は悪化し、互いに音信不通の状態に。58年の歳月が流れていった……。そんなある時、姉の消息が知らされる。人生の残り時間が少なくなる中、姉への思いが再び頭をもたげ始めた恵子。「拉致されたらどうするんだ」という子どもたちの反対を押し切り、恵

子は訪朝を決意。人生初めての海外旅行が北朝鮮となった。“謎の隣国”で目にする未知の世界。それはその後の恵子の人生をも変えていく……。《帰国事業》とは1959年から1984年にかけて行われた在日朝鮮人とその家族の北朝鮮への集団的な移住、いわゆる〈帰国事業〉。当時、日本中のメディアも北朝鮮を「地上の楽園」と持ち上げそれを後押しした。国民的な熱狂の中、送り出された「帰国者」の中には日本人の妻、約1,800人が含まれていた(子どもを含めると日本国籍保持者は約6,600人)。「3年経てば里帰りできる」。当時流布されていたその言葉信じ、未知の国に渡った日本人女性たち。しかしその後、日朝政府間の対立が続く、彼女たちの消息はほとんどわかっていない。

ホームレスがダンスでつながってゆく?

ダンシングホームレス

2019年 / 監督: 三浦渉 / 配給: 東京ビデオセンター
/ 上映時間: 1時間39分



©Tokyo Video Center

普段その姿を目に止めることもない、路上生活者。彼らは何を思っているのか。本作の主人公「新人Hソケリッサ!」は、路上生活者や路上生活経験者だけで構成されたダンスグループだ。メンバーは家庭内暴力や病気、社会的な挫折を味わい、疎外感に苛まれながらホームレスになった。グループの主宰者は、振付師のアオキ裕キ。あらゆるものを捨ててきたからこそ、唯一残された原始的な身体から人間本来の生命力溢れる踊りが生み出されるのだという。人生からすべてをそぎ落とした彼らは、生きるために舞う。新宿で路上生活をする西。ダンサーを夢見たが、人間関係や借金問題に疲れ、ホームレスになった。一度は死も考えた西が「新人Hソケリッサ!」と出会う。そこには同じように、す

べてから逃げてきた小磯、病を抱える横川、父親の暴力に苦悩した平川など、人生の辛酸をなめた仲間がいた。そんな彼らはみな明るく、どこかユーモラスだ。グループには、“人に危害を加えない”以外ルールはない。無断で休んでも構わない。アオキは言う「社会のルールがいいですか?」と。監督は新進気鋭のドキュメンタリスト・三浦渉。自らカメラを持ち、3年に渡り密着した。見つめ続けたその先には、想像もつかないラストが待っていた……。ソケリッサの“生きる舞”は、排除の論理が広がるいまの日本社会に痛烈なメッセージを与える――。

- 第12回「座・高円寺」ドキュメンタリーフェスティバル大賞
- アメリカ国際映画祭“Spotlight Documentary Film Awards”銀賞

地下鉄サリン事件の被害者がオウムと向き合う

AGANAI 地下鉄サリン事件と私

2020年 / 監督: さかはらあつし / 配給: Good
People / 上映時間: 1時間54分



©2020 Good People Inc.

1995年、オウム真理教が引き起こし日本中を震撼させた地下鉄サリン事件。通勤途中で被害にあった本作監督さかはらあつしは、事件から20年の時を経てAleph(オウム真理教の後継団体)の広報部長・荒木浩と対峙する。さかはらと荒木は、ともに所縁の地を訪ねる旅に出て、対話を繰り返す。凄惨な事件後もなお信者でありつづける心のありようとは何か。人を救うのではなく苦しめる宗教とは?監督は友人を諭すように、荒木に接し、その心の内に迫ろうとする。事件により人生を狂わされた未だに精神的・肉体的な苦しみを抱える被害者。その「被害者」が「加害者」にカメラを向ける。ここでは「客観性」や「中立性」を掲げる「ドキュメンタリーの常識」は通用しない。この対峙の先に見える「真実」とは?

監督のさかはらはPTSD(心的外傷後ストレス障害)と神経への後遺症を抱えながら、事件から20年を経て、考え抜いた末、「地下鉄サリン事件とオウム真理教」に向き合う決意をした。1年間の交渉の末、Aleph広報部長・荒木と再会し、そして2015年3月、さかはらと荒木は、さかはらの郷里(京都側の丹波)に向かう列車の車中にいた。偶然にも二人は同じ丹波出身だったが、荒木の郷里(兵庫側の丹波)を訪ね、その間、二人の対話は続く。そして二人が同時期に学んだ京都大学に向かうのだった…。荒木が京都大学で教祖麻原と出会うまで、どのような子供時代を過ごし、入信した後、何を考え、そして事件後、何を思っているのか。さかはらの妥協のない追求は続く。